

18. 愛知県の豊橋市食農産業クラスターにおける生産者サイドの関わり II

～豊橋温室園芸農業協同組合の取り組み～

1 豊橋市食農産業クラスター

1.1. 豊橋市食農産業クラスターの概要

豊橋市は、全国有数の農業産地で、野菜をはじめ、米、果樹、畜産、花きに至るまで様々な農業が営まれている。また、業務用から最終消費者向けの商品を製造する食品加工企業、農業機械、農業用資材メーカー等、食品や農業に関連する企業が多く立地している。

そこで、豊橋市では、「食」と「農」を核とするクラスター形成を推進することにより、農業、食品関連産業等、地域産業の活性化を図るため、「豊橋市食農産業クラスター推進計画」を策定しようとしている。2006年度は、「豊橋市食農産業クラスター推進計画」策定に向けて、農業団体、食品加工企業等の関係者を集めたワーキングを開催してきた。ワーキングには、社団法人食品需給研究センターからもオブザーバーとして参加している。

1.2. 戦略的農畜産物の活用

「豊橋市食農産業クラスター推進計画」が策定された2007年度以降は、全国シェアと知名度の高い青じそ（大葉）、うずら、きゃべつ、とまとの4品目を戦略的農畜産物に位置づけ、それらの活用を検討する4つの品目別クラスター研究会を立ち上げて推進しようという計画である。

そこで、2006年9月22日に、豊橋市食農産業クラスターに対する生産者サイドからの関わりを把握するために、豊橋温室園芸農業協同組合大葉部会の尾崎千尋部長、井川和英前部長に大葉生産者の現状とクラスターに対する意向をお伺いした。

2 豊橋温室園芸農業協同組合の取り組み

2.1. 豊橋温室園芸農業協同組合大葉部会の設立

豊橋温室園芸農業協同組合は、温室園芸の販売専門農協として、1949年に設立された。大葉部会、菊花部会、花穂・ほじそ部会、菊葉部会、エディブルフラワー部会、ベルローズ部会、ハーブ部会、鉢物部会の8部会からなり、現在、組合員のほとんど全員が専業で「つまもの」を周年栽培し、全国一のシェアを誇る「つまもの」販売を行っている。

大葉の販売は1962年から行われ、1968年に大葉部会を発足し、共選、共販体制を確立した。東三河地域の大葉の生産量は全国シェア50%を超え、全国一の産地とな



豊橋温室園芸農業協同組合大葉部会、前部長の井川和英氏(左)と現部長の尾崎千尋氏(右)



豊橋温室園芸農業協同組合

っている。

2.2. 大葉の有効成分

大葉には、βカロテン（にんじんの1.2倍）、ポリフェノール（ほうれん草の3.3倍）が含まれており、野菜の中でも抗酸化性（生活習慣病やガンの原因になるといわれる活性酸素を消去する）が強い。尚、抗酸化性は120度に加熱処理をしても低下せず、酢の物、漬物等にしても維持されるため、非常に優れた野菜といえる。

また、血液をさらさらにする、貧血・不眠症や夏バテ解消、整腸効果、利尿作用、アトピー・花粉症状の改善、食中毒予防等の効果もある。

2.3. 大葉の生産状況

豊橋温室園芸農業協同組合大葉部会の生産者は約 130 名で、栽培面積約 124,000 坪と全国最大規模の生産が行われている。大葉は、ほぼ一年中生産できるが、時期により増減があり、4月～6月が旬で需要も多い。冬場（1月～3月）は需要・生産量ともに少ない。

また、収穫するのはほぼA級品のみで、B級品以下は収穫していない。仕事が忙しくなる上、見返りが少ないB級品は売る発想そのものがないそうである。ただ、夏場は普段より大きな葉も取れるので、そういったものを加工用に回すことはあるそうである。しかし、生育が悪くなる冬場は、ほとんど加工用には回らず、周年加工に回すのは難しいようだ。

実際、夏場に加工会社との直接契約で加工用に出荷することもあり、例えば、2ヶ月半で6tほしいという驚くような注文もあったそうである。ただ、スポット的なので毎年決った数量等の契約があるわけでもない。定期的に出荷できるのであればもう少し具体的に加工品に対して考えるが、現状ではそこまで考えていないそうである。

2.4. 加工用の大葉供給の可能性

大葉を栽培する温室は一棟約 50～150 坪で、農家によっても違うが年 2～4 回、植え替えを行っている。引き抜いた大葉は現在廃棄しているので、植え替え時期がきた大葉を機械で刈って加工用に回すことは可能なようだ。50坪で1～1.5tくらいになるので、これを利用できるのであれば、生産者としてもメリットがあるそうである。

2.5. 大葉の加工品

現在、ジュース、ペースト等の加工品を試作している。まだ、加工したときに大葉の効能が残っているかどうかの分析はできていない。これが、うまく市場に出せるようになった際には、加工を農協で行うのではなく、地域の加工メーカーに任せて、地域連携の中で取り組んでいきたいという考えを持っているそうである。

今後、商品開発や加工品の効能分析、加工品製造を地元の大学や研究機関、加工メーカー等と協力して取り組んでいくことによって、大葉クラスター形成の可能性を秘めていると思われる。

(文：社団法人食品需給研究センター 藤科智海)



大葉の選別、袋詰作業



豊橋温室園芸農業協同組合大葉部会、藤澤直幸検査長の
大葉圃場

